

中世の恋愛詩

菅 野 正 彦

フランスの歴史家 C. セニョボス (1854-1942) は「愛は 12 世紀の発明」¹⁾ と述べた。トゥルバドゥールは、1100 年頃、南フランスのオック語の地に忽然と現れた「愛を歌う叙情詩人」を指す言葉で、西洋文学にロマンチック・ラブが現れるのは 12 世紀と言われる。ポワトゥー伯・アキテーヌ公ギヨーム九世 (1071-1127) は、熱烈な詩を作り、曲を付けてリラに合わせて歌った²⁾。C. S. ルーイスの言葉を借りると、「この革命に比べたら、ルネッサンスなどは文学の水面を騒がすさ波にしかすぎない」³⁾ のかもしれない。吟遊詩人が登場する以前に、男女の恋はどのように扱われたのであろうか。

シャルルマーニュ大帝にまつわる事件や人物を扱った一連の英雄詩がある。それらは「武勲詩」(chanson de geste) と総称され、“geste” の文字通りの意味は英語で “notable deeds” で、英雄達の勲功の讃美である⁴⁾。この武勲詩は現在約 80 篇をかぞえ、最も有名な詩が『ローランの歌』(La Chanson de Roland) である。4002 行からなるこの歌は古フランス語で書かれ、12 世紀初頭に完成した。

『ローランの歌』には、西暦 778 年、スペイン遠征の帰途、シャルルマーニュの後衛軍がピレネー山脈のロンスヴォーでバスク人に襲われ、全軍が壊滅した「比較的重要でない歴史的イベント」⁵⁾ に基づいている。引用の最後の 1 行、「待ち伏せる災いは避けることができない」が事件の顛末を暗示している。

Nes poet garder que mals ne l'i ataignet. (1.9)⁶⁾
(わざわざ、彼を襲わざるを得ず。)⁷⁾

『ローランの歌』では歴史は物語 (ロマンス) へと変容する。例えば、同じキリスト教徒のバスク人が異教徒のサラセン人に変えられ、778 年の歴史的イベントが第一回十字軍 (1096) 当時の雰囲気で作られている。これは詩人の無知や素朴さに依るのではなく、むしろ巧みな置換法である。これを聴衆は素直に享受したのである。ローランの義父ガネロン (ダンテ『地獄篇』32.122 参照) は、異教徒のマルシル王と密議を謀る。裏切者ガネロンは、ローランを殿軍を守る者として「そは、ローラン、わが義子なり」(Rollant, cist miens fillastre, 58.743)

と言って王に推挙する。彼の裏切りにより異教徒が殿軍を切り通しで待ち伏せる。象牙の角笛を吹いて王に助けを請うべきか否か、オリヴィエと激論を戦わす。「ローランは勇ましく、オリヴィエは賢し」(Rollant est proz e Oliver est sage, 87.1093)と歌われ、ローランは「武」に、オリヴィエは「智」に勝る。オリヴィエはローランに角笛を吹くように進言するが、「そは、たわけ者の振舞いぞ！」(Jo fereie que fols!, 83.1053)と言って拒否する。その結果、全員が戦死することになる。

『ローランの歌』にはゲルマン民族が誇りとする戦闘的な騎士魂は見られるが、吟遊詩人に見られる「至純の愛」(fin'amors)⁸⁾は全く見られない。当時、忠誠・友愛・勇気の三つの徳が騎士に求められ、ローランはこれら騎士としての理想的な徳を備えていた。C. ドウソンは、『ローランの歌』で表現されているのは「宗教的愛国心、あるいは十字軍的精神といったものである」⁹⁾と指摘している。

苦戦を強いられてローランは前言を翻し、角笛を吹くことを主張する。今度は、オリヴィエが話を蒸し返して彼をなじる。今日でも、二人の会話に不思議なほど人間味が感じられる。

Dist Oliver : 《Par ceste meie barbe,
Se puis veeir ma gente sorur Alde,
Ne jerreiez ja mais entre sa brace! 》(130.1713-21)
(オリヴィエいう、「わがこの顎髭にかけて言わん、
われ、いとしき妹オードに再会するを得ば、
君、断じてその腕に抱かれて寝ることなからん！」)

『ローランの歌』は叙事詩であって、恋愛叙情詩ではない。それにしてもオリヴィエが「この顎髭にかけて、妹に再開することができたとしても、お前の腕なんかに抱かせてやらないぞ」と即物的な言葉を吐く。妹は、兄の思いのままになる操り人形のような存在である。ローランは角笛を吹く。しかし、シャルル王が引き返したとき、軍は既に全滅していた。

ローランが息を引き取るまでに138行を要し、その間、彼は親友、王、剣(有名なデュランダル)、名誉、また彼の魂まで口にするが、許嫁オードのことは全く念頭にない。

シャルル王はアーヘンの宮廷に帰還する。許嫁オードが、「隊長ローラン、いづくにかある？ われを伴侶とせんこと誓いしかの殿は？」と真っ先にローランの消息を尋ねる。王は「汝われに求むるは、死者の消息ぞ」と彼女に答える。英雄を賛美する武勲詩ではごく普通のことであった。

Ço dist al rei : 《O est Rollant le catanie,
Ki me jurat cume sa per a prendre?》
.....
《Soer, cher'amie, de hume mort me demandes.
Jo t'en durai mult esforcet eschange :
Ço est Loewis, mierz ne sal a parler ;
Il est mes filz e si tendrat mes marches.》(268.3709ff.)

（王にいう、「隊長ローラン、いづくにかある？
われを伴侶とせんこと誓いしかの殿は？」

.....
「わぎも子よ、親しき友よ、汝われに求むるは、死者の消息ぞ。
なを一段とすぐれたる替り、汝に取らせん。
そは、ルイなり....」)

引用から明らかなように、作者は美女オードの内面の悲しみに一切触れない。まるで品物でも投げ与えるかのように、「一段とすぐれたる替り、汝に取らせん」と言って、息子を与えようと彼女に語り掛ける。素っ気ない会話で浪漫的恋愛とは無縁である。ゲルマン民族の封建騎士道では、恋は男を脆弱にするものと見なされ、友情や恩義が重視された。女性の地位は相対的に低く、武勲詩でも恋愛は軽く扱われている。

12世紀はヨーロッパの覚醒期で、人間生活のあらゆる面に改革運動が起こった。C. H. ハスキングは、12世紀を活発で創造的で革新的な世紀と捉えた。彼の『12世紀ルネサンス』（1927）という名著によって、現在この言葉は歴史概念として使われている¹⁰⁾。

12世紀、南仏のプロヴァンス地方に忽然と女性を高貴な存在として崇拜し、熱烈な愛を捧げる叙情詩人が現れる。彼らは愛の詩を作り、それに曲を付け、リラ (lyric の原義は ‘singing to the lyre’) に合わせて情熱的に歌った。H. ダヴァンソンの言葉を借りると「われわれはギヨーム九世と共に、それまでとは全く別の価値体系の中に、新しい愛に魅入られた領域に入り」¹¹⁾ 込むことになる。ギヨーム九世が浪漫的恋愛詩の祖と目されている。孫娘エレアノール (1122?-1204) は1137年にカペー王家のルイ七世と結婚、1152年に離婚。同年、プランタジュネット家のアンジュー伯、後のイギリス王ヘンリー二世 (1133-1189) と再婚する。マリー・ド・フランス (c. 1160-c. 1190) は王妃とルイ七世との間に生まれた長女で、後にシャンパーニュ伯夫人となる。ベルナルト・ド・ヴェンタドルン (fl. 1150-80) は国王夫妻に随行してイギリスへ渡った¹²⁾。

「宮廷風恋愛（雅びの愛）」(amour courtois, fin'amors) と呼ばれるのは、ジョングルール (放浪楽人) と異なって、吟遊詩人達は宮廷に出入りして、作詩・作曲をしたからである。彼らは王妃や既婚の貴婦人に捧げる愛の歌を、人に気付かれないように作った。D. ド・ルージモンは宮廷風恋愛を問題にすると、トゥルバドゥールと、異端と断定されたカタリ派との間に密接な関係があったことを力説している¹³⁾。

「宮廷風恋愛」はアンドレアス・カペラーヌスによって『恋愛術』(De Arte Honesti Amandi, c. 1186) の中にラテン語で “In omnibus urbanum te constituas et curialem” (すべからく都風、かつ宮廷風たるべし) と規則化される¹⁴⁾。

“troubadour” はオック語 (langue d'oc) で “trobador” で、“trobar” (発見する、作詩・作曲する) という動詞に由来する¹⁵⁾。吟遊詩人ジョフレ・リュデル (12世紀中葉) の『五月に日の長くなるころ』(Lanquan li jorn son lonc en may)¹⁶⁾ では「遙かなる愛」(amor de terra lonhdana) が歌われる。彼はブライユの領主で、巡礼者からトリポリ伯夫人の評判を聞くと見知らぬ夫

人に恋をする。早速、十字軍に加わる。しかし、船中で病を得て宿に運ばれる。これを伯夫人が知り彼を病床に訪ね腕に抱く。彼は気が付き神に感謝する。彼は腕に抱かれたまま息絶える (et enaissi el mori entre sos bratz)。亡骸を埋葬させ、その日に伯夫人はヴェイルを被って (en aquel dia, ella se rendet morga) 修道女となったことが、伝記 (Vidas) に記されている¹⁷⁾。

リュデルが十字軍に参加して、1147年に「海の彼方」(oltra mar) にいたことは知られているが、伝記が纏められるのは100年後、13世紀のことで、実際に彼がトリポリ伯夫人に会ったか否かは定かでない。「遙かなる愛」(amor de loing) という言葉が8回も歌の中に繰り返される。最後のリフレインに見られる「愛するも愛されることなし」(Q'ieu ames e non fos amatz, 49) と運命づけた父 (pairis, 51) は、ギヨーム九世を指していると言われる¹⁸⁾。以後、これらの歌がヨーロッパの詩人達の想像力を掻き立て、詩的靈感を吹き込むことになる。

Lanquan li jorn son lonc en may,
M'es bels douz chans d'auzels de loing,
E qand me sui partitz de lai
Remembra'm d'un'amor de loing.
Vauc, de talan enbrons e clis
Si que chans ni flors d'albepis
No'm platz plus que l'inverns gelatz. (1-7)

(五月に日の長くなるころ／遠い小鳥の歌がこころよく／そして そこから離れ去るとき／遙かなる恋が思い出される／悲しみに胸ふたぎ うつむき歩み／もはや小鳥の歌も さんざしの花も／凍てつく冬と同じく気に染まぬ)¹⁹⁾

トゥルバドゥールの叙情詩を特徴づける幾つかの常套句、例えば「遠い小鳥の甘い歌」(dous chans d'auzels de loing), 「遙かなる恋」(un'amor de loing), 「さんざしの花」(flors d'albepis) などが使われている。喜びのない荒涼とした気持ちを「凍てつく冬」(l'inverns gelatz) に譬えている。特に“amor de loing”が各連2行目(4, 9, 16, 23, 30, 37, 39, 44)に, “loing”が各連4行目に繰り返される。

Be'm parra jois qan li qerrai
Per amor Dieu, l'amor de loing;
E, s'a lieis plai, albergarai
Pres de lieis--si be'm sui de loing!
Adoncs, parra'l parlamens fis
Qand, drutz loindas, er tant vezis
C'ab bels [digz] jauzirai solatz. (22-28)

(神の愛にかけ かのひとに遙かなる恋を乞うとき／いかばかり喜ばしく思えることかもし かのひとのお氣にかなえば / その傍らに宿をとろう--今はただ遠くとも！ / 遠方の恋する男がようやく間近に身をおき / 美しい言葉に喜びを満喫するそのとき / 愛の集いに間然とするとところなし)

注目すべき言葉は“parlamens”(26)である。一般に、この言葉は「語らい」とも訳される。本来は「判決を下す会議や集会」の意味を表す法制用語で²⁰⁾、リュデルには身近な言葉であった。後には次第に、吟遊詩人達は技巧に走り、恋愛に関する難解な分析や論議に傾き、

自然な恋愛感情を吐露することを止める。彼らは宗教用語や法制用語を頻繁に使用することになる。「恋愛評定」を想起させるのがこの言葉である。

トゥルバドゥールの黄金期を代表する詩人として、ベルナルト・ド・ヴェンタドルンがいる。身分は低い、美貌と才能に恵まれて王妃アリエノールの宮廷に出入りし、最後はシトー派の修道院に入ったと言われる。『太陽の光を浴びて 雲雀が』²¹⁾の歌は、今日でもレコードに吹き込まれて人々に親しまれている。

(陽の光を浴び Can vei la lauzeta mover
de joi sas alas contral rai,
que s'oblid'e's laissa chazer
ai! tan grans enveya m'en ve
de cui qu'eu veyau jauzion!
meravilhas ai, car desse
lo cor de dezirer no'm fon. (1-8)

(陽の光を浴びて 雲雀が／喜びのあまり羽ばたき舞い上がり／やがて心に広がる甘美の感覚に／われを忘れて落ちる姿を見るとき／ああ どれほど羨ましく思えることか／恋の喜びに耽る人々の姿が／われながら訝しく思えるその一瞬／渴望にこの胸がはり裂けぬは何故か)

春を代表する雲雀 (lauzeta) の歓喜と、渴望 (dezirer) に胸がはり裂ける自分とを対比させている。次の詩節では「恋に詳しい自分だと信じていたのに／ああ、知らぬことの何と多かったことか／愛して甲斐のないひとを／なを愛さずにいられない (car eu d'amar no'm posc tener Celeis don ja pro non aurai)」と恋の苦しみを歌う。雲雀はアリエノールを指しているとも言われる²²⁾。

12世紀末までに、プロヴァンスの愛の歌は南仏の地から北仏やドイツへ、更にイタリアへと伝搬して行った。北ではオヴィディウス (43 B.C. - ? A.D. 17) の伝統と混ざり合い、クレチアン・ド・トロワ (12世紀後半) のアーサー王物語群、例えば『ランスロ又は車上の騎士』 (*Lancelot, ou Le Chevalier de la Charrette*, c. 1172) に、やがてドイツでは中世騎士物語や恋愛詩 (Minnesang) を、イタリアでは甘美な新詩体 (il dolce stil nuovo) の詩人達、例えばグイド・カヴァルカンティ (? 1255-1300) の影響でダンテの『新生』 (*La Vita Nuova*) や『神曲』 (*La Divina Commedia*)、またフランチェスコ・ペトラルカ (1304-74) のカンツォーネを生む。

ドイツのヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ (c. 1170-c. 1230) を初めとするミネジンガー (Minnesinger) 達がいる。その中のハインリッヒ・フォン・モルンゲン (fl. 1190-1200) の愛の歌 (第二連) を取り上げてみよう。

Minne, diu der werlde ir fröide mêret.
sêt, diu brâhte in troumes wîs die frouwen mîn
dâ mîn lîp an slâfen was gekêret
und ersach sich an der besten wünne sîn.
dô sach ich ir werden tugende, ir liechten schîn,
schône und für alle wîp gehêret ;

niwan daz ein lützel was versêret

ir vil fröiden rîchez rôtez mündelîn. (1-8)

(喜びの高揚を世の人々にもたらす愛よ、ご覧、眠っているとき夢で私のところへ乙女を連れて来たのを。この上もない大きな喜びの瞑想に耽っていた。私は見た、彼女の素晴らしき品性、誰よりも美しい明るいイメージを。少し乱されたのは、喜びに満ちた赤い小さな口のみ。)

この連では夢のモチーフ (troumes) が使われている。詩人は女性の美や徳を想像している。夢は実体のない、人を欺くものである。この詩の鍵語は “schin” で、それは美と仮象、即ち、光の美しさと人を欺く要素の二つの意味を表している。複雑な感情を伝えるために、これほど観念連想のメタファーを使った詩人はいない、と W. T. H. ジャクソンは述べている²³⁾。

ジャンルとしての Minnesang は 1150 年頃に忽然と現れ、1300 年を過ぎると文学の舞台から忽然と消える。そして、数世紀間息の根を止めていたが、愛の歌の再発見により啓蒙の時代とロマン主義の両時代をドイツは迎えることになる²⁴⁾。

アンドレアス・カペラーヌスが、雅びの理論を『恋愛術』に纏めた。伯夫人マリーの宮廷の礼拝堂付き司祭を務めたアンドレアスは『恋愛術』の中で、後述する通り愛の神に仕える者に必要な 12 の条件と、愛の規定を 31 ケ条に要約し、エレオノールはそれらに基づいてポワチエで愛の法廷 (cour d'amour) を開いた。訴える男たちの前で、貴婦人の裁判官によって判決が下されるのである²⁵⁾。アンドレアスの狙いは、騎士道的、宮廷的美徳を生み出す愛、粗野で無教養な者を教化し、下賤な生まれの者を高貴な人間に変身させることであった。『恋愛術』と訳されるように、愛は習得すべき一つの技術 (art) となり、封建社会を支える騎士道は粋の騎士道となって行く。

北フランスの地ではオヴィディウスの『愛の技法』(Ars Amatoria)²⁷⁾ が、彼の真意が誤解されながらも既に翻訳されていた。後の西洋文学に偉大な影響を及ぼした表現を列挙しよう²⁸⁾。

1 恋人は全て青ざめた顔をする。

Palleat omnis amans : hic est color aptus amanti ;

Hoc decet, hoc stulti non valuisse putant. (I, 729-30)

(しかし、恋人は全て青ざめた顔をなさい。これが恋人の顔色です。このような容貌が彼には似つかわしい。このような顔付きから、あなたが病気であと思わせなさい。)

2 恋人は体を震わせることを常とする。

Vidit ut oppressa vestigia corporis herba,

Pulsantur trepidi corde micante sinus. (III, 721-22)

(平坦な草の上に彼女が人の足跡を見た時、踊る心臓が不安な胸中で鼓動する。)

4 ため息は恋の特徴である。

Spectet amabilius iuvenem, suspiret ab imo

Femina, tam sero cur veniatque roget. (III, 675-76)

(女性にもっと愛らしい容貌で若者を見させ、ため息をつかせ、なぜかくも遅く来たかを尋ねさせよ。)

5 恋は眠りを不可能にする。

Attenuant iuvenum vigilatae corpora noctes (I, 735)

(夜の不眠が恋人の体を細らせる。)

6 恋人達の間では狂気は通例である。

Quid tibi mentis erat, cum sic male sana lateres,

Procri? quis adtoniti pectoris ardor erat? (Ⅲ, 713-14)

(プロクリスよ、お前の気分は何だったか、このように狂って隠れているとき。お前の狂った心の中にどんな火があったのか?)

7 痩せることは恋の兆候である。

Arguat et macies animum: nec turpe putaris

Palliolum nitidis inposuisse comis.

Attenuant iuvenum vigilatae corpora noctes

Curaque et in magno qui fit amore dolor. (Ⅰ, 733-36)

(痩せることが君の気持ちを証明している。輝いた髪に頭巾を被せることを卑しいと思うな。夜の不眠が、また大きな情念をもたらす不安と苦悩が、恋人の体を細らせる。)

以後、このような特徴が恋の描写に頻出することになる。シャンパーニュ伯夫人の宮廷では、掟や規定に則して愛の法廷が開かれたと考えられる。愛の神に仕える者に求められる12の愛の掟 (amoris praecepta) がある²⁹⁾。卑近な規則を列挙しよう。

VII Dominarum praeceptis in omnibus obediens semper studeas amoris aggregari militiae.

(万事につき、汝の愛する女性の命令に従え、愛の奉仕に鋭意これ努めよ。)³⁰⁾

XI In omnibus urbanum te constituas et curialem.

(何事にも上品で礼儀正しく振る舞うべし。)

XII In amoris exercendo solatia voluntatem non excedas amantis.

(愛の喜びを実戦するに、愛する女性の要望の域を越えるなかれ。)

更に、恋愛の法廷との関連で、31 条からなる愛の規定 (regulae amoris) が成立する³¹⁾。その規則を若干列挙しよう。

I Causa coniugii ab amore non est excusatio recta.

(結婚は恋愛を妨げる真の口実とはなりえない。)

XIII Amor raro consuevit durare vulgatus.

(愛はいったん公になると長続きはしない。)

XV Omnis consuevit amans in coamantia aspectu pallascere.

(愛人は皆愛する女性の前では顔あおぎめる。)

XVI In repentina coamantia visione cor contremescit amantis.

(愛する女性の姿が突然現れると、愛人の心はうち震える。)

XVII Novus amor veterem compellit abire.

(新しい愛は古い愛を追いやる。)

XXIII Minus dormit et edit quem amoris cogitatio vexat.

(愛の想いに悩む者は睡眠や食欲が減退する。)

XXVI Amor nil posset amori denegare.

(愛人は愛する女性に何事も拒むことはない。)

詩人は南ではトゥルバドゥール、北ではトゥルベール (trouvères) と呼ばれた。北の代表的詩人が先のクレチャン・ド・トロワである。彼の初期の作品はオヴィディウスの流派に学

んだところが多い。『ランスロ』は宮廷風騎士道物語の粹を示している。当時、その方面の権威者であったシャンパーニュ伯夫人マリーの宮廷に住んでいた。作品の冒頭で、クレチャンは彼女の依頼でこのロマンスを作ったことを明記している。

Puis que ma dame de Chanpaigne
vialt que romans a feire anpraigne,
je l'anpendrai molt volentiers... (1-3)³¹⁾

(シャンパーニュ伯夫人が私にロマンスを作ることを引き受けるように望まれたので、私は喜んでそうしようと思う...)

次に述べるように、『ランスロ』は他のロマンス作家の作品とは質的に違っている。彼は、身近かな衣裳や宴や出来事を利用して、12世紀フランスの理想を描いた。このように、彼は新しい調子を備えた超自然や、恋愛に関する心理的・道徳的な諸問題に読者の興味を向けた³³⁾。女性が恋人に無理難題を押しつけても、報酬を払う義務はない。アーサー王の妃ギニヴィアを救うため、ランスロはメレアガンを打ち負かす。数々の危険を犯し、死を意味する「剣の橋」をも渡る。恥を忍んで荷車にも乗る。彼女の命令とあらば騎上試合で卑怯者として振る舞う。王妃を救出した手柄をガウェインに横取りされても不平をこぼさない。このように『ランスロ』は宮廷風恋愛を擁護したロマンスなのである。

クレチャンの一連のブルタニュ物語、即ちアーサー王伝説との関連で重要なのは『トリスタンとイズー』(*Tristan et Iseut*)の物語である。主たる物語として、アングロ・ノルマンの北方詩人(トルヴェール)トマが1155-1170年の間に作った詩篇と、ノルマンディーの北方詩人ベルウルが12世紀の終わりに作った詩篇とが存在する。後者の『道化のトリスタン』に関する二つの挿話的小詩があり、一つは1170年頃、他は13世紀初頭に書かれたものである³⁴⁾。

イズーの母親が、結婚愛で老王マークと若きイズーとを結ぶために調合した媚薬をトリスタンとイズーが誤って飲んだため、その魔力で結ばれ、神と人間の掟に背き、数々の試練や悔恨を斥けて互いに愛し合い、苦しみながらも操を守る。物語の背景が示すように、ケルト起源のこの伝説はアングロ・ノルマンの詩人達によって文学としてフランス語で定着させられた。トリスタンとイズーは、あらゆる試練、別離、内心に起こる悔恨を斥けて生きるかぎり愛し合うのである。

A Tristan dist....
«—Sire, j'aim Yseut a merveille,
.....
Mex aim o li estre mendis
Et vivre d'erbes et de glan
Q'avoir le reigne au roi Otran...»
Iseut... Mot li crie merci sovent :
«Sire, por Deu omnipotent,
Il ne m'aime pas, ne je lui,
Fors par un herbe dont je bui

Et il en but : ce fu pechiez.

Por ce nos a li rois chaciez.》

（トリスタンは答える。「私はイズウを熱愛しています。... サラセンの王オトランの位を得るよりも、／彼女と共に乞食の生活を送り、雑草や、櫛の実を／食べて生きていた方がましだと思います。」／イズウは..... くり返し慈悲を乞う。「隠者様、全能の神様かけてお誓ひ申します。／この方も二人お互いに愛し合っておりますのは／ひたすら二人の飲んだ秘薬の所業でございます。／それはもう、罪に違ひございません。その為二人は王様から放逐されたのでございます。）」

ダンテ・アリギエーリ（1265-1321）は「現実概念の必然的前段階、彼本来の蕾、『新曲』に必要不可欠な前奏曲」³⁶⁾と言われる『新生』を書いた。これは個人的経験に満ちた詩と散文からなり、ダンテの青年時代の内面生活、即ち、ベアトリーチェ・ボルティナリーに対する彼の愛を語っている。ソネットの前半を、上で述べた規則との関連で引用してみよう。

Ne li occhi porta la mia donna Amore,

per che si fa gentil cio ch'ella mira ;

ov'ella passa, ogn'om ver lei si gira,

e cui saluta fa tremar lo core,

si che, bassando il viso, tutto smore,

e d'ogni suo difetto allor sospira : (*Vita Nuova* XXI)³⁷⁾

（わが淑女《愛》を目にやどし、その見るものを貴くす、彼女過ぐれば人みなそなたに向かひ、会釈すればその人、心をおどらし、頭を低れ、色を失ひ、己がおちどのために大息す。）³⁸⁾

「目」(occhi), 「淑女」(donna), 「愛」(Amore), 「貴くす」(fa gentil), 「心をおどらせ」(fa tremar lo core), 「頭を低れ、色を失ひ」(bassando il viso, tuttosmore), 「大息す」(sospira) 等、愛の道具立ては揃っている

宮廷風恋愛の伝統をイギリス文学に導入したのは、ジェフリー・チョーサー (? 1340-1400) であった。彼はギヨウム・ド・ロリスとジャン・ド・マンの『薔薇物語』(*La Roman de la Rose*) (彼は前半の一部を翻訳した), フランスの詩人ギヨーム・ド・マショー (? 1300-1377), ジャン・フロワサル (1337-? 1404), ユスターシュ・デシャン (1340-? 1406), イタリアのダンテ, ペトラルカ, ジョヴァンニ・ボッカチオ (1313-1375) 等の作品を通して、宮廷詩の伝統を身に付けたのである。その中で、彼は女性崇拜, 女性への奉仕, 恋わずらい, 愛の高い倫理性を学んだ。特に、『薔薇物語』, ボエチウスの『哲学の慰め』(*De Consolatione Philosophiae*), ダンテの『神曲』の影響は、初期の作品から晩年の作品に至るまで随所に見られる。無名の詩人が恋人との分かれの「暁の歌」(aube) (プロヴァンス語で alba) を歌っている。

En un vergier sotz fuella d'albespi

tenc la dompna son amic costa si,

tro la gayta crida que l'alba vi.

Oy Dieus, oy Dieus, de l'alba! Tan tost ve!

(果樹園のさんざしの葉陰で／奥方はひしと恋人を抱きしめる、／夜廻りが暁の光を見たと呼ぶまで、
／「おお神よ、神よ、暁が! こんなにも早く!」)³⁹⁾

ボッカチオは『恋の虜』(*Il Filostrato*)で、トゥルバドゥールに倣って、恋人との分かれの「暁の歌」を書いている。

Li quai come Criseida cantare
senti, dolente disse : —O amor mio,
ora si fa da doversi levare,
se ben vogliam celar nostro disio,
ma io ti voglio, amor mio, abbracciare,
pria che ti lievi, un poco, acciocche io
men doglia senta della tua partita ;
deh, abbraccia tu me, dolce mia vita. (III 43)⁴⁰⁾

(クリセイデは、雄鶏が鳴くのを聞いて／悲しそうに言った。「ああ、愛しい人、／私たちの欲望を隠そうと思っても／起きる時刻です／でも、起きる少し前に抱きしめたい。／別れの悲しみが少なくなるように／あ！私を抱いて、愛しい人。)

チョーサーはボッカチオの『恋の虜』(*Il Filostrato*)を種本として、『トロイルスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*)を書いた。チョーサーは原典の朝の別れの歌、即ち「後朝の歌」(*aubade*)を約三倍に拡充・敷衍している。トゥルバドゥールの伝統によると、朝の別れの歌は、女性が歌うことになっている。チョーサーは、伝統に則してクリセイデに暁の歌(*dawn-song*)を歌わせている。しかし、この歌にはチョーサーのアイロニーが込められており、後に離別は現実のものとなる⁴¹⁾。

“Myn hertes lif, my trist, al my plesaunce,
That I was born, allas, what me is wo,
That day of us moot make disseveraunce!
For tyme it is to ryse and hennes go,
Or ellis I am lost for evere mo!
O nyght, allas, why nyltow over us hove
As longe as whan Almena lay by Jove?

O blake nyght, as folk in bokes rede,
That shapen art by God this world to hide
At certeyn tymes wyth thi derke wede,
That under that men myghte in reste abide,
Wel oughten bestes pleyne and folk the chide,
That there as day wyth labour wolde us breste,
That thow thus fleest, and deynest us nought reste.

Thow doost, allas, to shortly thyn office,
Thow rakle nyght! Ther God, maker of kynde,

The, for thyn haste and thyn unkynde vice,
 So faste ay to oure hemysperie bynde
 That nevere more under the ground thow wynde!
 For now, for thow so hiest out of Troie,
 Have I forgon thus hastili my joie!” (III 1422-42) ⁴²⁾

（私の心の命、私の信頼、私の喜よ、／生まれたことを、ああ、どんなにか後悔していることでしょう、／夜が明けると、お別れしなければなりません、／だって、起きて、ここから出て行く時刻ですもの、／さもないと、これからずっと面目を無くしてしまうことになりますわ。／ああ、夜、お前は どうして長く私達の上に居てくれないの、／アルクミーナがジョーヴの側で寝た時間と同じほどに。

ああ、暗い夜、書物に書いてある通り、／この世を包み隠すために、神様はお前をお造りになったんだわ／お前の黒い着物で、暫くの間、／そして、その下で人間は休むことが出来るんだわ。／昼が労働で私達を悩ますとき、／動物達が愚痴をこぼし、人間がお前を責めるのも当然だわ／お前はどのように逃げ去って、私達に休息を許してくれないのね。

ああ、ほんのちょっぴりしか、お務めをしないのね、／せつかな夜、自然をお造りになった神様が、／お前のせつかさ、不親切さのために、／お前がもう地の下で廻らないように、／お前を私達の半球に、何時までもしっかりお縛りになればいいのに／だって、お前が急いでトロイの町から出て行くので、／私、こんなに慌ただしく喜びを失ってしまったんですもの。）

G. ハイエットは「チョーサーはヨーロッパというものを知っていた最初の英国の大詩人であった。彼が偉大であったことの一つの理由は、彼がヨーロッパの各国語の文学の影響を受けて、英語と英文学を向上させるのにそれを利用したという事実にある。彼が知っていた近代語はフランス語とイタリア語であったが、フランスからの影響はイタリアからの影響ほど重要ではなかった。彼がイタリアから受けた影響は、その後もミルトン、バイロン、ブラウニングなどに非常に強く深い影響を与えたのである」⁴³⁾と述べている。

これまで概観したように、ロマン主義という言葉は、本来、はっきりした意味をもっていた。古典主義は古典文学を規範とし、ロマン主義は中世ロマンスを規範としている。また、ルネッサンス（Renaissance）がギリシア・ローマへの回帰と、また古典文学の復興を意図したように、ロマン派復興（The Romantic Revival）は中世への回帰と中世文学の復興を意図した。ヨーロッパのロマン主義は、単に文芸の領域に止まらず、人間の世界（精神的・物質的）に大変革をもたらした。激しい情熱は抑圧された人間の自由と解放、更に革命へと繋がって行く。19世紀イギリス・ロマン派の詩人達の愛の詩は、12世紀ギヨーム九世を始め他の吟遊詩人達が創造したものである。彼らは中世ロマンスを発掘し、その価値を再認識したのである。プロヴァンスのトゥルバドール達の愛の叙情詩は、ダンテ、ペトラルカ、シェークスピア、ブラウニング、スウィンバーンへ、また、クレチャン・ド・トロワの恋と冒険のロマンスは、チョーサー、マロリー、スペンサー、テニソンへと受け継がれて今日に至っている。

注

- 1) V. L. ソーニエ『中世フランス文学』, 神沢栄三・高田 勇訳 (白水社, 1958), p. 71.
- 2) H. ダヴァンソン『トゥロバドゥール: 幻想の愛』, 新倉俊一訳 (筑摩書房 1972).
- 3) C. S. ルーイス『愛とアレゴリー: ヨーロッパ中世文学の伝統』, 玉泉八州男訳 (筑摩書房, 1972), p. 25.
- 4) ベディエ・アザアル共編『中世文学 I』, 辰野隆・鈴信太郎監修 (創造元社, 1942), pp. 39-86.
- 5) J. B. モラル『中世の刻印—西欧的伝統の基盤』, 城戸 毅訳 (岩波新書, 1972), p. 143.
- 6) *La Chanson de Roland*, ed. and tr. Gerard Moignet (Paris: Bordas, 1985). 引用は全てこの版による。
- 7) 『ローランの歌』, 有永弘人訳 (岩波文庫, 1965). 訳文は全てこの版による。
- 8) マルカブリュ (Marcalbru) は “fin'Amors, fons de bontat” (XI, 36) と歌っている。L. T. Topsfield, *Troubadours and Love* (Cambridge Univ. Press, 1975), p. 67.
- 9) C. ドウソン『中世のキリスト教と文化』, (新泉社, 1969), p. 215.
- 10) C. H. ハスキング『十二世紀ルネサンス』 別宮貞徳・朝倉文市訳 (みすず書房, 1997); 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス: 西欧世界へのアラビア文明の影響』 (岩波書店, 1993).
- 11) ダヴァンソン, p. 165.
- 12) ダヴァンソン, p. 27.
- 13) D. ド・ルージュモン『愛について—エロスとアガペ』, 鈴木健一訳 (岩波書店, 1959). 彼はトゥルバドゥールとカタリ派について詳細に論じている。pp. 98-204.
- 14) *Andreas Capellanus on Love*, ed. and tr. P. G. Walsh (London: Duckworth, 1982), p. 116.
- 15) R. Boase, *The Origin and Meaning of Courtly Love* (Manchester Univ. Press, 1977), pp. 131-32.
- 16) Topsfield, pp. 62-63.
- 17) Topsfield, p. 42.
- 18) Topsfield, p. 65.
- 19) 『フランス中世文学集 1 信仰と愛と』, 新倉・神沢・天沢訳 (白水社, 1990), pp. 413-414. 訳文は全てこの版による。
- 20) 福井芳男他編集『フランス文学講座 3 詩』, (大修館書店, 1979), p. 35.
- 21) Topsfield, pp. 128-129.
- 22) 『フランス文学講座 3 詩』, p. 42.
- 23) W. T. Jackson, *The Literature of the Middle Ages* (New York and London: Columbia University Press, 1960), pp. 260-61.
- 24) *Medieval Literature: The European Inheritance I*, Part 2. ed. B. Ford (Penguin Books, 1983), p. 186.
- 25) *Medieval Literature*, p. 547.
- 26) L. ウサ『恋愛評定 南仏叙情詩人』, 正木 喬訳 (白水社, 1960), p. 61ff.
- 27) *Ovid: The Art of Love and Other Poems*. tr. J. H. Mozley (Loeb Classical Library, 1979). *Ovid: The Art of Love*, tr. R. Humphries (Indiana Univ. Press, 1957).
- 28) T. A. Kirby, *Chaucer's Troilus* (Peter Smith, 1958), pp. 3-13; Dodd, W. G., *Courtly Love in Chaucer and Gower* (Peter Smith, 1959).
- 29) *Andreas Capellanus on Love* p. 116.
- 30) アンドレアス・カペラーヌス『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛指南書』瀬谷幸男訳 (南雲堂, 1993). 訳文の引用は全てこの版による。
- 31) *Andreas Capellanus on Love* pp. 282-84.
- 32) J. Stevens. *Medieval Romance* (London: Hutchinson University Library, 1973), p. 209.
- 33) R. W. Southern. *The Making of the Middle Ages* (London: Arrow Books, 1962), p. 254.
- 34) V. L. ソーニエ『中世フランス文学』, p. 65. ベディエ・アザアル共編『中世文学 I』, p. 126.
- 35) 引用は, ベディエ・アザアル共編『中世文学 I』, pp. 125-137 から。ケルト文学については, 尾島庄太郎『英吉利文学と詩的創造—ケルト民族の稟質の展開』, (北星堂書店, 1953) に詳しい。
- 36) E. アウエルバッハ『世俗詩人—ダンテ』, 小竹澄栄訳 (みすず書房, 1993), p. 106.
- 37) *Dante Alighieri: La Vita Nuova*, ed. and notes by Lodovico Maguliani (Milano, 1952). *Dante Alighieri: La*

- Vita Nuova*, tr. B. Reynolds (Penguin Books, 1984).
- 38) ダンテ『新生』, 山川丙三郎訳 (岩波書店, 1958), pp. 62-63.
- 39) 福井芳男他編集『フランス文学講座 3 詩』, p. 46.
- 40) *Giovanni Boccaccio: Il Filostrato*, tr. R. P. apRoberts and A. B. Seldis (New York & London: Garland Publishing, 1986), p. 152.
- 41) S. Schibanoff. "Criseyde's 'Impossible' Aubes," *JEGP*, 76 (1977), 326-33.
- 42) I. D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3 Ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987). 引用はこの版による。
- 43) G. ハイエット『西洋文学における古典と伝統』上, 柳沼重剛訳 (筑摩書房, 1969), p. 99.